



Jack Burdenの物語 : R. P. WarrenのAll the King's Menの解釈に向けて

著者	松山 信直
雑誌名	同志社大学英語英文学研究
号	59
ページ	47-66
発行年	1993-03
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001725

Jack Burden の物語—R. P. Warren の *All the King's Men* の解釈に向けて¹

松山信直

All the King's Men は作品の中心に、Willie Stark の物語がある。彼は農家に生まれて州の役人になり、州知事にまでのしあがって上院議員を目指そうとした時に暗殺された。ところがこの物語は、新聞記者として Willie を取材し、その後彼の秘書として働くようになった Jack Burden によって語られている。Jack Burden は Willie の近くに位置する作中人物の一人で、Fitzgerald の *The Great Gatsby* の Nick Carraway や、Hawthorne の *The Blithedale Romance* の Miles Coverdale や、Melville の *Moby-Dick* の Ishmael などに非常に近い役割をはたす。

これらの人物は、それぞれ中心人物の近くに位置して、中心人物のことやその人物にかかわる出来事を数年後に語ることになっている。この作中人物の語り手は、多少個人的な差があるにしても、単なるゆきずりの目撃者や忽然と現れたりポーターではなく、中心人物達と自分をかなり接近させ、彼らの行動や生き方を理解してしばしば心情的に彼らの世界にのめりこみ、時には一参加者として彼らと一体になって行動することもあるが、結局、かなり覚めた目で彼らを眺め、彼らを客観的に、また批判的に判断し、時には彼らを越えた彼方を見据えることもある。そして彼はそのようなことが可能な知覚力と理解力を備え、自分の知覚や理解を表現する言葉を摸索する能力を持っている。

彼はこのように観察者であり、語り手であるが、同時に、自分なりの経歴や性格を持つ人物として独自の存在でもある。彼の語りが構築する小説にお

いて、中心人物の物語のほかに彼自身の物語が構築されていることも、忘れることはできない。*The Blithedale Romance* の最後で、Miles Coverdale が残した一言、「私は一私自身は一愛していたのです—ブリッソラを」² という言葉は、いかに非難されようとも、彼の語る物語が、プライズデール農場の Zenobia や Hollingsworth の物語であると同時に、彼自身の物語でもあったことを雄弁に話っている。

Ishmael や Nick Carraway についても、ほとんど同様のことが言えるが、*All the King's Men* では、語り手の Jack Burden 自身が、過去を探ることに関連して「ウイリー・スタークの物語とジャック・バーデンの物語とは、ある意味では、一つの物語だ」³ と語るだけでなく、作者の Penn Warren 自身もこの作品の Modern Library 版の序文でそのようなことを言っている。⁴ Jack Burden の物語とは一体何なのか、どのような意味を持ち、Willie Stark の物語とどのようにつながるのか、この点を検討してみたい。⁵

論を進めるにあたって、Willie Stark の物語を見ておくことにしよう。Willie は州の会計主任をしていたときに、学校の建築に関して、役人といかがわしい建築業者との癒着を見抜いてその不正を訴えるが、耳を傾ける人は少ない。ところが、2年後、火災訓練の際に学校の非常階段が崩れ、死亡者のでる事故が起る。そこではじめて人々は Willie が正しかったことを知る。Willie の人気に注目した一派は、知事候補の予備選挙で対立候補の票を割るために、Willie をダミーの候補にたてる。何も知らない彼は、田舎の人々や貧しい人々の味方になるつもりで選挙戦にとりくむが、やがてダミーにされていることを知って、立候補を辞退して反対側の応援に転じ、自分を利用しようとした側の候補を蹴落してしまう。

その後 Willie は、法律を勉強して田舎の弁護士として活躍するようになり、1930年の選挙に出馬して知事になる。知事になった Willie は、辣腕を振るって州の政治を改めたが、彼のやり方はかなり強引になってゆき、策略を

めぐらせて競争相手を押さえこむ一方で、自分の為になりそうなことは、あくまでも守ろうとする。たとえば、収賄事件を起こした監査役の White に辞表を書かせはするが、この男が「利用」でき、「これから先役に立つ」(136) ことを見越して、彼に負い目を負わせて手元にとどめることにする。州議会では、反対派が White の弾劾のみならず、Willie 自身の弾劾運動をも進めようとするが、彼は弾劾に賛成する議員の弱みにつけこんで手をひかせてしまう。さらに上院議員選挙で、Willie が押す人の反対派の候補を有力者の Irwin 判事が押すことを知ると、Irwin 判事の過去を探らせ、何か弱みを見付けて彼の態度を変えさせようとする。

Willie はこのように術策を弄して権力をほしいままにする。彼は直接の部下何人かに囲まれている。かつて自分をダミーの知事候補として操った Tiny Duffy を常にそばに置いて言うなりに使い、彼を政治家に仕立てたプロの女性政治運動家で後に彼の愛人になる Sadie Burke や、運転手兼ボディガードの Sugar-Boy、そして秘書役の Jack Burden などに取り囲まれている。Willie はこの人々を使って意のままにことを動かす文字通り King のごとき存在である。この作品の表題の一つの意味は、King のごとき権力者とそれを取り巻く人々を意味することは否定できない。

知事になった Willie は、理想的な病院を設立しようとし、元知事 Stanton の息子で、有名な外科医の Adam をその責任者として依頼する。一方、Willie の反対派は彼の息子 Tom が女の子に妊娠させたことを知って、圧力をかけようとする。Willie は反対派の有力者 Larson という男に病院の建築の仕事をまかせ、反対派と手を切らせて反対派の足元を崩そうとする。息子の Tom がフットボールの試合で大怪我をして、全身不随の身体になってしまうと、Willie は急に Larson との契約を破棄すると言いだし、仲介した Duffy の面目を潰してしまう。すると Adam に匿名の電話がかかり、Adam の妹 Anne と Willie との間に愛人関係があること、そのために Adam は病院の責任者にされたなどと、暴露と中傷の話を聞かせる。Adam

はこの電話を聞いて妹を罵倒し、妹の説明も聞かずに血相を変えて飛び出してゆき、州議事堂で Willie をピストルで撃ち、自分はその場で Sugar-Boy に撃たれて死んでしまう。Willie の方は、三日目に容体が急変し、「こんなことにならなくてもよかったろうに」（400）と言い残して死んでゆく。

このように、*All the King's Men* が州レベルの政治家を扱っていることは否定できない。しかも Willie が、ルイジアナ州の知事で上院議員にもなった Huey Pierce Long (1893-1935) と似通っており、Penn Warren 自身も、この小説の最初の着想を得たとき Huey Long が頭にあったことを認めている。⁶ところが、Warren は「序文」でこの小説がいわゆるモデル小説であることを否定し、「ウイリー・スタークはヒューイー・ロングではなかった。ウイリーは彼自身に過ぎなかった」と述べ、さらにこの序文の結びで、「この作品は政治に関する作品として意図されたものではなかった。政治はただ枠組みの物語 (the framework story) を提供するだけで、この物語の中ではより深い関心が——その究極の意味が何であっても——ひとりでに生じてきたのだった⁸」と述べた。

この「政治はただ枠組みの物語を提供するだけ」という Warren の言葉から、Hawthorne が *The Blithedale Romance* の序文で、ブライズデール農場のモデルになった Brook Farm について「この社会主義的コミュニティに対する現在の関心は、日常の旅の街道から少し離れたところに劇場 (a theatre) を建てることにあった⁹」と述べた言葉が直ちに思い起こされる。*The Blithedale Romance* の「劇場」と *All the King's Men* の「枠組みの物語」を中心になる物語をいれる器と考えると、*All the King's Men* の政治社会と *The Blithedale Romance* の実験的なコミュニティとは、非常によく似ている。Willie ははじめは州の政治の不正をあばき、貧しい田舎の人々の為に政治を改め、税制を改革し、この州を少なくとも住みやすいところにしようとする理想主義的な意図に燃えていた。はじめて知事

の予備選挙に立ったとき、Willie はダミーにされているとは知らずに、州の貧しい人々を救うキリストのような存在だと思込んでいるとさえ言われた。(81) ところが理想にもえた Willie の政治世界は、上に見たように、やがて術策と取り引きと権力愛に汚れていった。一方ブライズデールも、当初は同胞愛の新しい社会を目指し、呼び名としてユートピア、オアシスなども考えられていたが、¹⁰ 現実には経済競争に巻き込まれ、隠れた意図に利用され、人間関係のもつれを生み、Zenobia の自殺をひきおこしてしまう。両者とも、理想世界を目指しながらもディストピアに墮してしまった世界である。

Penn Warren は Conrad の *Heart of Darkness* の Kurtz に言及して、「彼(クルツ)は貪欲、虚栄、暴力により、さらに光をもたらず者としての使命を拒むことにより、また(人生に道徳的方向を与える)思想を拒絶することにより……破滅してしまった」¹¹ と述べている。貪欲を金銭欲だけでなく、権力欲をも意味すると解するならば、Kurtz の墮落は Willie Stark の墮落に重なってくる。Penn Warren は *All the King's Men* の「序文」の中で、「私の政治家は……その個人的な動機がある意味で理想主義的で、多くの面で社会の改善という大義に尽くすことにはなるが、力によって、さらには、墮落に抗するためふるう力によって墮落する人間ということになるだろう」¹² と述べている。政治家をイギリスの会社のエイジェントと置き換えてみれば、この言葉は Kurtz にもあてはまる。Kurtz は自分が得たものを自分の権力の象徴とみなして誇示するが、実は文明の力を背景にして手にいれた権力に皮肉にも彼のほうがとりこになってしまっていた。語り手の Marlow は Kurtz の権力のオブセッションを次のように語っている。

“You should have heard him say, ‘My Ivory.’ Oh yes, I heard him. ‘My Intended, my ivory, my station, my river, my—’ everything belonged to him... but that was a trifle. The thing was to know what he belonged to, how many powers of darkness claimed him for

their own.¹³

この「私の……」と叫ぶ Kurtz のオブセッションはまた *The Blithedale Romance* の Hollingsworth のものであったろう。彼は自分が建設を夢見ている罪人更生施設にとらわれていて、おそらく心の中では「私の施設」と叫んでいたに違いない。そしてこのようなオブセッションはまた、Willie Stark のものでもあった。Willie も自分の理想である病院にとりつかれていて、工事の細部を厳しく指示して、次のように言う。

“For it’s mine,” the Boss said, “you hear—that’s my hospital—it’s mine.” (362)

このように、理想主義的政治を指向しながらも権力におぼれて墮落し、人々のための病院を「俺の病院」と叫ぶ Willie Stark の近くに、語り手 Jack Burden がいる。彼の機能は *The Blithedale Romance* の Coverdale が述べた語り手としての立場に非常に近い。Coverdale は自分の立場を、「古典劇のコーラス」にたとえ、「個人的な関心の可能性から離れた」立場に身を置くが、「他の人々には共感 (sympathy) を持つ」¹⁴ と言っている。Coverdale が自ら述べている機能を十分果たしているかどうかは検討の余地があるにしても、*All the King’s Men* の語り手 Jack Burden が、「俺の病院」と叫ぶ Willie Stark の近くにおいて果たす機能も、Coverdale が語る機能に非常に近い。Penn Warren は「序文」において、この *All the King’s Men* をはじめ芝居として書いたが、満足できなくて改定にとりかかったとき、この作品を小説として考えていることに気づいたと言い、技術的な配慮から、中心人物よりも「より高度な自意識 (a higher degree of self-consciousness)」を持ち、「一種のコメンテーターであり、説明役 (*raisonneur*) でもありまたコーラスの役もする人物が必要だ」¹⁵ と考えて、Jack Burden を考えたと述べている。

ところが、さきに触れた類似の作品の語り手がそれぞれ自分なりの性格や

経歴を持つ人物であるように、*All the King's Men* の Jack Burden も作中の一人の人物として自分なりの性格や経歴をもっている。Jack Burden は Willie Stark の物語にとっては副次的な人物かもしれないが、自分の物語の主人公でもあった。Penn Warren はそのことを「この物語はある意味では、物語の語り手ジャック・バーデンの物語になった」と述べているし、¹⁶ Jack Burden 自身も、すでに先に引いたように、「ウイリー・スタークの物語とジャック・バーデンの物語とは、ある意味では、一つの物語だ」と述べている。

Jack Burden は、この小説の形で語る物語を1939年の夏前に語ったとしている。彼はルイジアナ州の Burden's Landing で生まれ育ったが、6歳の頃に父 Ellis Burden が家を出てしまい、それから母は次々と男をかえて結婚し、タイクーンの Daddy Ross、ヨーロッパの貴族の Count Covelli、若い重役の Theodore Murrell が彼の義父になった。母は Jack が Harvard か Princeton で学ぶことを期待したが、彼はその意向に反して州立大学に入学し、足が悪かったために第一次大戦には加わらず、戦後に法律の大学院に進む。しかし、法律の勉強になじまず、途中で退学してしまう。Jack は故郷の Burden's Landing で元知事の Stanton の息子 Adam とその妹 Anne と幼なじみだったが、大学生の頃には Anne と当然結婚するものと思っていた。Anne は法律の大学院をやめるという Jack に、好きなことをしなさいと言って、かねてから「あなたとなら、小豆を食べてでも生活する」とか、「丸太小屋でも生活する」(301-2)と言っていたことを強調する。しかし二人は結局別々の道を歩むことになる。

法律の大学院を止めた Jack は歴史の学生になり、Cass Mastern という南北戦争で戦死した人の資料を得て Ph D 論文に取り組むが、論文を完成することができず、クロニクル新聞社の記者になる。Anne はその後何度か婚約したが、結婚までは至らず、現在も独身で、不幸な子供達の世話をしている。Jack はその後 Lois と結婚して離婚し、これまた独身である。Jack

は1922年に学校建設のための公債発行を取材して、はじめて Willie Stark と会い、その後、学校建設にまつわる不正を訴えた Willie の活動や、担ぎ出された Willie の選挙運動を取材し、数年後 Willie が本格的に知事に立候補したときに、社の方針に反して彼を支持する記事を書いたために新聞社をやめることになる。その彼に、知事になった Willie Stark から声がかかり、彼の秘書として調査や原案作りに協力することになる。Willie が病院を建てるときには、その責任者になるよう幼なじみの Adam を説得する。

一方、Anne は、子供達の施設に州の援助を求めるために Willie に会って以来、Willie と深い関係を持つようになり、Jack は大きなショックを受け、しばらく旅に出る。Jack は Willie の命を受けて、幼い頃から親しく接していた Irwin 判事の過去を探り、彼に収賄事件があったことを探し出してしまふ。Jack はこれを Willie に報告する前に Irwin 判事に示すが、Irwin 判事はその事実を認め、Jack が帰ったあとピストルで自殺してしまふ。Irwin の自殺の知らせを受けた時の母の悲しみによって、Jack は母が愛していたのは Irwin だけだったことを知り、さらに自分が母と Irwin との間に生まれた子供であることも知る。母は Ellis Burden と結婚したが、母が Irwin を愛し、彼の子供を産んだことを知った Ellis は家を出た。しかし母と Irwin はさまざまな事情で結婚できず、母は次々と男をかえたのだった。

Adam が妹の Anne と Willie の関係を知らされ、Willie を暗殺しようとして殺され、Willie も死んだあと、Jack はこの暗殺が、Duffy と Sadie が Adam に Willie を殺させるように仕組んだものであることを知るが、彼は Duffy に復讐することを思い留まり、Willie の死によって副知事から知事になった Duffy のもとで働くことも断り、母と和解し、Anne と結婚して、病気になった Ellis Burden を引き取って世話することにする。そして、かつて放棄した Cass Mastern の伝記を書物にまとめようとし、この書物を完成したら Burden's Landing を去るつもりだ、というところで彼の物

語は終わる。

今見てきたように、Jack Burden の物語は、Jack が記者として Willie Stark を取材し、さらに秘書として Willie の身边で働いたことで、Willie Stark の物語と表面的にはつながってくる。そしてさらに、Adam やその妹 Anne, Irwin 判事も二人の物語の接点となる。しかし大切なことは、Jack Burden の物語は彼の精神史であるということだろう。彼の物語は彼の精神がたどった軌跡であり、彼のものの見方の変革の歴史である。物語の終り近くで、彼は次のように述べて、自分の考え方に変化が起こったことを明らかにしている。

This has been the story of Willie Stark, but it is my story, too. For I have a story. It is the story of a man who lived in the world and to him the world looked one way for a long time and then it looked another and very different way. The change did not happen all at once. Many things happened, and that man did not know when he had any responsibility for them and when he did not. There was, in fact, a time when he came to believe that nobody had any responsibility for anything and there was no god but the Great Twitch. (435)

ここに言及している“Great Twitch”（大いなる痙攣）は、Jack Burden のものの見方に大きくかわかり、歴史の学生としての挫折、母への不信と回避、父と思っている Ellis Burden への軽蔑、幼なじみの Anne Stanton との不毛な関係など、彼の人生の問題に大きくからんでくる。彼の変革は、この「大いなる痙攣」的ものの見方からの転換であり、しかも上の引用にあるように、その転換あるいは変化と言えるものは、決して突然に起こったものではない。彼の失望と挫折の積み重ねには、後で述べるように、「世界は巨大なくもの巢」（188）という認識の欠如が大きくからんでいる。そしてそれ

と裏腹に、この「大いなる痙攣」という理解へのこだわりがある。

Jack Burden の Ph D 論文の挫折は、彼のものの見方の問題点を如実に示している。彼が論文にとりあげようとした Cass Mastern という人物は、Ellis Burden の母 Lavinia の次兄で、1864年にアトランタの陸軍病院で死亡した。Jack はこの Cass のことを聞いたことがあったが、Cass の残した日記や Cass の兄 Gilbert の手紙などの資料を入手して、これと一年半ばかり取り組んで、Cass の世界についてほぼすべての事実を押さえることができた。しかし、それでも彼には Cass Mastern という人間を知ることができなくて、そのため論文は完成しなかった。Cass に関するエピソードは、全十章からなるこの小説の第四章の大半を占めていて、さながら *The Blithedale Romance* の Zenobia の寸劇や *Moby-Dick* の “The Town-Ho’s Story” を想い起こさせる劇中劇として、Jack Burden の物語全体に深くかかわっている。

Cass Mastern はケンタッキー州レキシントンのトランシルヴァニア大学に学んだとき、銀行家の Duncan Trice 夫妻と知り合い、Duncan にかわいがられるが、やがて彼の妻 Annabelle とねんごろな関係に陥り、Duncan の目を盗んで密会を重ねるようになる。妻の冷たい態度と召使たちのゴシップによってそのことに気づいた Duncan は、結婚指輪をはずして Annabelle のベッドに置き、Annabelle 以外の人には事故としか思えない状況を作って自殺してしまった。夫の死後、Annabelle は指輪をベッドの上で発見した黒人の下女の眼付きが気に入らず、彼女が結婚していたにもかかわらず川下に売り飛ばしてしまう。Cass は黒人の下女の売られたあとを追いかけるが、見つけることはできなかった。

Cass は友人への裏切りが、友人の死を招いただけでなく、黒人の下女の運命をも変えてしまったことに愕然とする。彼はその後 Annabelle と別れ、自分の農園の黒人奴隷をすべて解放するが、農園経営はうまくゆかない。南北戦争がはじまると、彼は一兵卒として参加して負傷し、アトランタで死ん

でゆく。Cass は自分の無責任な行為が、自分一人にとどまらなくて、連鎖的に他の人の運命に大きく係わっていったことを知らされたのだった。そのことは「巨大なくもの巣」の比喩をひいて、次のように語られている。

Cass Mastern lived for a few years and in that time he learned that the world is all of one piece. He learned that the world is like an enormous spider web and if you touch it, however lightly, at any point, the vibration ripples to the remotest perimeter and the drowsy spider feels the tingle and . . . springs out to fling the gossamer coils . . . and then inject the black, numbing poison under your hide. (188-189)

ところが、Cass のことを調べていた当時の Jack には、この Cass が学びとったことが把握できていなかった。変革をとげた語り手の Jack は、当時の自分を振り返ってこう述べる。

. . . to him the world then was simply an accumulation of items, odds and ends of things like the broken and misused and dust-shrouded things gathered in a garret. Or it was a flux of things before his eyes (or behind his eyes) and one thing had nothing to do, in the end, with anything else. (p. 189)

当時の Jack は、Cass が得た認識——「世界は巨大なくもの巣」のごとく相互に連鎖的に他の人や他の事柄に関連しており、一人の人間の行為も他人の運命に大きく係わっているという認識——を欠き、世界はばらばらなものごとの寄せ集めで、相互に何の関係もないと考えていたというのである。彼に Cass が理解できず、Cass に関する事実を積み重ねても論文ができなかったのは当然と言えよう。

そして、この Jack の認識の浅さは、彼の母や、父と思っていた Ellis Burden に対する態度とかかわってくる。彼は次々と別の男と結婚した母を表面的な事実だけでとらえて、不信と軽蔑を深めていた。母の生き方がなぜ

そうなったのかを問うこともしなかったし、何が原因となったのかを見抜く洞察にも欠けていた。また、Ellis Burden については、或る日母に家から追い出されてしまって、貧しい人々の間に住んで宗教のパンフレットをくばって人間の罪深さを説いている敗北者としてしか見ていなかった。なぜ彼がそのようなことになったのかを Jack は問いもしなかった。Jack の見方では、Ellis が妻に浮気された Annabelle の夫 Duncan Trice に重なっていることを見抜けなかったし、まして、Ellis が家を出た理由も洞察できなかった。

Jack の「巨大なくもの巣」の認識の欠如はこれだけに留まらなかった。Anne が Willie Stark と親密な関係におちいったことにショックを受けた Jack は、Anne を Willie の情婦にしたのは自分だという事実の恐ろしさに直面できなくなり、この事実から逃げるかのように車を飛ばして旅行する。そして、西部で「アン・スタントンという単語はジャック・バーデンにとって何の意味もない特に複雑な機械の名前にすぎず、彼自身もまたもう一つの複雑な機械の名前にすぎなかった」(311)という理解を得て、Anne Stanton と自分とは何のつながりもなく、Anne に関して自分には何の責任もないと考える。そして、この認識を確認するかのように、Jack は西部から帰る途中で、左の頬が時々痙攣する老人に出会った。彼の痙攣は先に言及した「大いなる痙攣 (the Great Twitch)」だが、その痙攣は顔や顔の背後にあるいかなるものとも何の関係もなく起こる部分的なもので、全くの「独立した現象」(313)だった。この“Great Twitch”は、Jack が西部で得た Anne についての理解を確認する現象で、人生はさまざまな事実の雑多なよせ集めに過ぎず、一つの事実は他と何の関連もなく、人には何の責任もないという認識を象徴するものだった。

Jack のこの「大いなる痙攣」の認識は、Cass の得た「巨大なくもの巣」の認識を Jack が得ていなかったことと関係がある。「巨大なくもの巣」が、

上に述べたように、さまざまな事実の関連と相互の影響を強調し、人間の道徳的責任の連鎖を認め、世界が有機的な一体であることの象徴であるのに反して、「大いなる痙攣」はその逆で、事実の間に相関関係はなく、そこに何の責任もなく、さまざまな事実は「独立した現象」に過ぎないとする象徴だからである。

しかし、ずっと後になって Jack はこの「大いなる痙攣」をもはや信じていないことに気がついた。それは彼自身が認めるように、さまざまな出来事を経験してゆくうちに、徐々に、知らない間に、彼のものの見方に変革が起こっていたからだった。

But later, much later, he woke up one morning to discover that he did not believe in the Great Twitch any more. He did not believe in it because he had seen too many people live and die. (436)

彼は多くの人が死ぬのを知った。Duncan Trice の自殺, Cass の死, Irwin 判事の収賄事件に関する Littlepaugh の自殺, Irwin 判事の自殺, Willie の暗殺, Adam の死などが次々に起こった。それは上に見たように、さまざまな事実が互いに結びつき、相互に関連しあっていたことを示していた。そして、一方、生きている Lucy Stark, Tiny Duffy, Sugar-Boy, Sadie Burke, Anne Stanton, Ellis Burden, Jack の母などは、それぞれの生き方をしているものの、その生き方も互に関連し合っていて、決して一人一人が独立して関係のない「大いなる痙攣」の状態にあるのではなかった。

Jack はさらに言葉を続けて、

He had seen his friend Adam Stanton die. He had seen his friend Willie Stark die, and had heard him say with his last breath, "It might have been all different, Jack. You got to believe that." (436)

と述べている。彼が聞いたこの Willie Stark の最後の言葉——「こんなことにならなくてもよかったのに」——は、Willie にも「巨大なくもの巣」の認

識が不十分だったことを示している。Willie が自分の病院の責任者として、立派な医者 Adam を任命し、さらに、政治的術策として Larson に工事をやらせることをいったん決めておきながら、息子の事故の後 Larson を降ろしたのは、理想的な病院をけがしたくなかったからだろう。彼は少なくとも理想家の Adam と自分は、無料の病院と老人ホームという彼の理想の病院において、互いに連帯していると思っていた。Adam に撃たれた彼が「こんなことにならなくてもよかったのに」と言ったのは、「ブルータスよ、汝もか」と言ったシーザーの心境だったろう。だが Willie は、自分と Anne との関係が兄の Adam や長年愛人関係にあった Sadie Burke にどのようにかわるかについて、全く考慮していなかった。彼にとって Anne との関係は「大いなる痙攣」に他ならなかった。ここに、Jack の認識の問題が、Willie Stark の認識の問題でもあったことが示されていると言える。

Willie の死は、Jack が「事実の人」と呼んだ Willie と、「理想の人」(436)と呼んだ Adam との葛藤の結果であり、その葛藤は政治家としての Willie と医者 Adam の二人の中に、それぞれ潜在的に存在していた理想と現実の相剋の顕現に他ならなかった。Willie にあっては現実が支配的になり、Adam においては理想が支配的になっていた。そして、Willie と Adam は、さながら二つに分かれた分身の“double”のごとく、相反する二つの性質が相互補完的に一對の二人の人物として形象化したのだった。しかし、二人は相反する性質の故に、互いに相手を抹殺し、消去し合わざるを得ない宿命にあったと言える。変革した Jack にはそのことが理解できた。それを彼は次のように表現する。

But at the same time Jack Burden came to see that his friends had been doomed, he saw that though doomed they had nothing to do with any doom under the godhead of the Great Twitch. (436)

言い換えれば、二人は「大いなる痙攣」ではなく、互いに関連し、影響し合わざるをえない「巨大なくもの巢」の宿命の下にあったのだった。そして、

Willie の最後の言葉が示すように、少なくとも Willie にはそのことが把握できていなかった。

「くもの巣」の理解を得た Jack Burden は、明らかに昔の彼ではなかった。彼は精神的に成長し、変革をとげる。母への不信も Ellis への軽蔑も消え、Cass についての理解も得られ、Anne との結びつきも再確認できたことがそれを物語っている。「過去とその重荷を受け入れることができなければ未来はない、なぜなら過去がなければ未来もないからだ。過去を受け入れることができれば、未来を望むことができるだろう、なぜなら過去からのみ未来を作れるからだ」（435）と彼は Anne に語ろうとつとめた。この認識も、時間の関係における「巨大なくもの巣」の認識とすることができるだろう。こうして Jack は Anne と結婚し、病気になった Ellis Burden を引き取って面倒をみてやり、Cass についての書物を書いているところで彼の物語は完結する。

先に述べたように、Jack Burden の物語は彼の精神史だった。この作品が Jack Burden の物語として読めることは今さら言うまでもなからう。そして、Jack Burden の物語における認識の問題が、同時に Willie Stark の問題でもあったことは明らかである。その意味で、表題の *All the King's Men* は、人間すべては相互にかかわりあう絆によって、空間的にも時間的にも「巨大なくもの巣」の関係のもとにあることを示している。“King”とは、この空間的にも時間的にも人間を相互に結び付けている「巨大なくもの巣 (an enormous spider web)」に他ならないのである。¹⁷

中心人物の近くに位置する作中人物を語り手に配するこの作品は、同様の語り手を持つ作品、Fitzgerald の *The Great Gatsby* や、Hawthorne の *The Blithedale Romance*、Melville の *Moby-Dick*、さらに Conrad の *Heart of Darkness* と関連する面を多くもっている。¹⁸ そのことには若干触れたが、Penn Warren がこれらの作品を熟知していたことは疑いない。

Moby-Dick の Queequeg についての言及も作中にある (278)。これらの作品の語り手は、中心人物の物語を語りながら自分自身の物語も展開する。その程度は作品によってまちまちだが、Penn Warren のこの作品は、他のどの作品よりも語り手自身の物語の比重が大きい。その意味で、ここに the story of the teller of a tale とも言える Jack Burden の物語を見てみて、彼のものの見方の問題点を探り、その見方からの転換を、「大いなる痙攣」から「世界は巨大なくもの巢」という認識への変化としてとらえてみた。

悪から善を創造しなければならないと言っていた (257) Willie Stark が、善を実現する力を政治的に得たとき、その力のとりこになって墮落していったのに対して、Jack Burden は人間相互の必然的有機的関係を認めることによって、人生の連鎖的・道徳的責任に目覚め、そこに救いを見いだしたといってもよいだろう。彼の救いは「巨大なくもの巢」の認識を欠いた Willie Stark の墮落と対になり、墮落と救いの表裏の関係において Jack Burden の物語と Willie Stark の物語は互いにかみ合い、小説として一体化していると言える。その意味で、この小説は、比喩的に言えば「巨大なくもの巢」の物語であり、連鎖的・道徳的責任へのめざめの物語だったと言えるだろう。

注

- 1 この論文は1987年12月5日に開催された第31回日本アメリカ文学会関西支部大会における講演「ジャック・バーデンの系譜～アメリカ文学の一つの語り手」の一部に加筆訂正を施したものである。なお、この小論は、すでに発表した「Vonnegut の *Cat's Cradle* とアメリカ小説の伝統」(『同志社大学英語英文学研究』51号 [1990年3月]) と対になるもので、論旨の一部に重複がある。
- 2 Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance*, in *The Blithedale Romance and Fanshawe*, "The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne," Vol. III (Columbus: Ohio State UP, 1964), p. 247.
- 3 Robert Penn Warren, *All the King's Men* ("1946"; New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1984), p. 157. 以下この作品からの引用は、本文中に出所頁を丸括弧に入れて示す。また、翻訳は私の試訳だが、一部で鈴木重吉氏の翻訳(白水

社、1971年版)を借用したことを感謝しておきたい。

- 4 Robert Penn Warren, "Introduction," *All the King's Men* (New York: The Modern Library, 1953), p. iv. 以下 AKM "Introduction" と略す。
- 5 *All the King's Men* 論のほとんどは多少ともこの問題を扱っているが、興味深いものとして二つの論文を挙げておこう。Norton R. Girault, "The Narrator's Mind as Symbol: An Analysis of *All the King's Men*" (*Twentieth Century Interpretations of All the King's Men*, ed. Robert H. Chambers [Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1977], 29-47.); Jerome Meckier, "Burden's Complaint: The Disintegrated Personality as Theme and Style in Robert Penn Warren's *All the King's Men*" (*Ibid.*, 57-72.).
- 6 AKM "Introduction," p. vi. Willie Stark と Huey Long の関係については Ladell Payne が論じている。"Willie Stark and Huey Long: Atmosphere, Myth, or Suggestion?" (*Ibid.*, 98-115).
- 7 *Ibid.*, p. v.
- 8 *Ibid.*, p. vi.
- 9 Hawthorne, *The Blithedale Romance*, p. 1.
- 10 *Ibid.*, p. 37.
- 11 Robert Penn Warren, "'The Great Mirage': Conrad and *Nostramo*," *Selected Essays* (New York: Random House, c1958), p. 35. なお Conrad と *All the King's Men* のかわりについては, Seymour L. Gross が次の論文で論じている。"Conrad and *All the Kings's Men*," *TCL* 3 (April 1957), 27-32.
- 12 AKM "Introduction," p. i.
- 13 Joseph Conrad, *Heart of Darkness*, ed. Robert Kimbrough ("Norton Critical Edition": New York: W. W. Norton, c1971), p. 49.
- 14 Hawthorne, *The Blithedale Romance*, p. 97.
- 15 AKM "Introduction," p. iv.
- 16 *Ibid.*, p. iv.
- 17 表題の King を特に論議の中心に据えたものに James Ruoff, "Humpty Dumpty and *All the King's Men*: A Note on Robert Penn Warren's Teleology" (*Twentieth Century Interpretations*, 84-92) がある。
- 18 このことについては, Jerome Thale ("Narrator as Hero," *TCL* 3 [July 1957], 67-69); Charles Kaplan ("Jack Burden: Modern Ishmael," *CE* 22 [Oct. 1960], 19-24); Ted N. Wiessbuch ("Jack Burden: Call Me Carraway," *CE* 22 [Feb. 1961], 361) などをはじめとして、多くの人が言及している。

Synopsis

The Story of Jack Burden—Toward an
Interpretation of R. P. Warren's
All the King's Men

Nobunao Matsuyama

In Robert Penn Warren's *All the King's Men* we find the story of Willie Stark, who was born into a farmer's family to rise to the governor of Louisiana and was shot to death. This story is told by Jack Burden, who first as a reporter covers Willie and then works for him as secretary. In the novel Jack is one of the characters around the central character, Willie Stark, and tells Willie's story sometime after his death. His function is close to that of Nick Carraway, Miles Coverdale, and Ishmael, narrators of *The Great Gatsby* (Fitzgerald), *The Blithedale Romance* (Hawthorne), and *Moby-Dick* (Melville) respectively. These narrators, besides telling the story of central characters and the events which happen to them, develop, within the novel, their own stories deriving from their personal history. So, the novels they tell contain the story of the central character and the story of their own as well. More remarkably conspicuous than these novels, *All the King's Men* presents the story of the narrator himself as is admitted by the author: "And the story, in a sense, became the story of Jack Burden, the teller of the tale."

This article offers an examination of Jack Burden's story, which can be defined, as I take it, as the locus of his soul's wanderings, and the history of the transformation of his view of the world. The transformation of his view is represented by the shift of emphasis from the Great Twitch to the enormous spider web; two major symbols closely related

to Jack's spiritual history.

Jack's immature and restricted point of view has resulted in his distrust of his mother, his derision of Ellis Burden, who was supposed to be his father, and his failure in completing the doctorate dissertation on the socio-biographical study of Cass Mastern, a southerner who liberated black slaves of his farm and died at the army hospital in Atlanta during the Civil War. Though Jack accumulated various facts about Cass, he could not comprehend the terminus idea Cass finally came to possess that "the world is like an enormous spider web," which implies the organic inter-relatedness of things, from which the chain of moral responsibilities derives. Jack had thought that the world is "simply an accumulation of items, odds and ends of things like the broken and misused and dust-shrouded things gathered in a garret." This is because Jack was haunted by the idea of "the Great Twitch," which he observed in an old man's left cheek on his way back from California. "The twitch was simply an independent phenomenon, unrelated to the face or to what was behind the face." Jack came to believe in the implication of the twitch that everything of this world has nothing to do with other things and no one has any moral responsibilities for unrelated things.

As a result he fell far short of comprehending the symbolic implication of Cass's idea of the enormous spider web: hence his failure in the Ph D dissertation. Also deeply connected with this was his attitude toward his mother and Ellis Burden, and also toward Anne Stanton, who had been his friend as a child, and who at one time accepted the prospect of becoming his wife but later left him and went her way. However, through many things that happened not without interconnection, including deaths of Judge Irwin, Adam Stanton, Willie Stark, Littlepaugh, etc. Jack has come to see the world differently. Though "the change did not happen all at once," he finally comes out to realize the idea of the enormous spider web and awakens to the sense of moral responsibility.

On the other hand, Willie Stark, who was shot by Adam Stanton and before his death told to Jack his final words. "it might have been all

different," is short of Jack's realization of the implication of the spider web. He was the Kurtz of Louisiana, a tycoon who believed in his ideals but when he acquired power to realize them he was corrupted by the power itself. So, while Jack has somehow achieved redemption Willie has fallen victim of his own power and is corrupted. In that sense, the story of Jack Burden is the other side of the coin, the story of Willie Stark. And the story of *All the King's Men*, made up actually by two stories, is in a sense the story of the enormous spider web, i. e., the story of moral awareness.